

〔菟園會集說〕蒲の花かつみ

寛政二年の冬、琉球の使人入朝しつと聞えしに故ありてかのともがらと應接をしつるもの、宇都宮にかへり来るありけり。○中琉人われに問ていはく、皇國は誠に文あり、武あり、大かたならぬよき國なれども。○下

倭國

〔下學集上天地〕倭國ワカニ  
倭國倭鳥禾切

〔段注說文解字人〕倭順貌

倭與委義略同、委隨也、隨從也、廣

〔山海經十二海內北經〕蓋國在鉅燕、南倭北倭屬燕、倭國

在帶方東大海內以女爲主、其俗露給衣服、無針功以丹朱塗身、不妬忌一男子數十婦也。

〔異稱日本傳上〕今按王充論衡曰、禹益并治洪水、禹主治水、益主記異物、海外山表、無遠不至、以所聞見作山海經、觀此則山海經者、益之所作堯時之書也。山海經有倭名、則倭名舊矣、凡異邦人、以我朝名倭、此爲權輿乎、然據我舊記、則倭名爲起於漢時矣。

〔駁戎慨言上之上〕後漢の光武が時に倭奴國奉貢といへるは、倭奴國はいづれの國をいへるにか、さだかならぬど、これも凡百餘國といへる中の一つにて、倭國之極南界也とあれば、つくしなどの南のかたつかたなるべし、然るを此後漢書の註にも倭といひ、唐書などに、日本古倭奴也といへるは、いかにぞや、こは本の詞をよくもわきまへず、なほざりに見て、まざらはしつるひがことなるを、御國の人すらなほわきまへず、倭奴をも、たゞ倭とひとつこと、心得をるかし、さるからかへりて、かの倭國之極南界也とあるをも、倭は國の極南界也として訓るは、いみじきひがことなり、さるつたなき文詞あらんやは。

〔後漢書五安帝〕永初元年十月、倭國遣使奉獻、倭國去樂浪萬二千里、男子鰐面文身、以文左大中小別尊卑之差、見本傳。

○按ズルニ釋日本紀引ク所ノ後漢書ニハ、倭國ヲ倭面國ニ作レリ。

〔後漢書八東夷列傳〕倭在韓東南大海中、依山島爲居、凡百餘國、○中建武中元二年、倭奴國奉貢朝賀、

瀧澤解